

旧植民地の落し子

台湾「高砂義勇兵」は今

石橋 孝 著



創思社出版

旧植民地の落し子

台湾「高砂義勇兵」は今

石橋 孝 著



創思社出版

旧植民地の落し子 台湾「高砂義勇兵」は今

著者略歴

石橋 孝（いしばし・たかし）

1924年、横浜市に生まれる。小学生時代を台湾・澎湖島で過ごす。

長崎経専（現・長崎大学経済学部）卒。在学中、軍隊へ。シベリヤ抑留5カ年。

銀行、食品会社に勤め、1988年辞任後、台湾の山地を踏査。

現住所 佐世保市船越町2180

検 印
省 略

平成四年三月十五日 第一刷 発行
定価 二千円（本体千九百四十二円）

〇〇九三三四四六―四二二

著 者 石 橋 孝

発行者 上 山 良 吉

印刷所 株式会社 隆 文 社

製本所 日宝綜合製本(株)

東京都板橋区徳丸二丁目五二番八号

発行所 創 思 社 出版株式会社

電話 〇三―三九三三―八四八〇

振替 東京七 一三二七

九州
編集部

福岡県筑紫野市原石坂七三―一八

電話 〇九二―九二―五九六四

振替 福岡六 一三九四二七

（落しはお取り替えいたしません）

目

次

はじめに	6
------------	---

写真で見る「台湾・山地からの報告」	9
-------------------------	---

第一章 霧 社	21
---------------	----

相飲み	22
-----------	----

霧社を訪ねて	37
--------------	----

人間模様	54
------------	----

第二章 強制移住地・清流	73
--------------------	----

アウイ・パワンとの出会い	74
--------------------	----

サヨンの鐘	96
-------------	----

口先だけの日本人	110
----------------	-----

お酒の歌	127
------------	-----

第三章	日本語教育	145
-----	-------	-----

教育に捧げた青春	146
----------	-----

叩かれてよかった	164
----------	-----

日本娘、蕃社へ行く	184
-----------	-----

思い出の雪山坑	206
---------	-----

第四章	高砂義勇隊員と遺族たち	221
-----	-------------	-----

老人の訴え	222
-------	-----

日本に武士道は残っているか	243
---------------	-----

日本精神	262
------	-----

遺族補償金裁判の行方	283
------------	-----

あとがき	303
------	-----

旧植民地の落し子たちは、今

はじめに

私は、小学生時代の大半を、台湾の澎湖島という小さな島で過ごした。そこでは、気温が下がる冬の日の朝にかぎって、台湾本島の険しい山並みが、不気味な輪郭を水平線の彼方に現わした。子供心にも、山地にしか住まない「高砂族」の、まだ見ぬ世界を想像して、小さな胸を躍らせたのは、そのころからである。

そんな私を、大人たちはこう言って脅した。

「悪戯をしたら、あの山から蕃人がやって来て、その首をチョン切るぞ」

世界を驚かせた「霧社事件」はその時、もう起こっていた。「タイヤル族」は、日本人を一三四人殺害した代償として、一〇〇〇人も命を失う結果となっている。犠牲者の数だけみても、これは明らかにバランスを欠く。

彼らにしてみれば、土足で彼らの領域に無断で侵入して来た日本人は、憎むべき存在だったに違いない。それが事件から僅か一〇余年しか経たないのに、太平洋戦争が勃発すると、日本のために銃をとり、血書志願までして、戦場に赴き、再び故郷に帰る者は少かった。「霧社事件」から「高砂義勇隊」に至る過程の中で、彼らの気持ちに変化していく背景には、いっ

たい何が働いたのだろうか。

私の山地にかける思いは、ますます強くなるばかりだった。そして、念願の入山を果したのが、三年前のことである。それから今日まで、数えてみたら、延べ一五〇日を「高砂族」と暮らしていた。

本書は言ってみれば、彼らの証言集でもあり、台湾植民地史の上で、支配される側に立った「少数民族」の、悲しい歴史でもある。

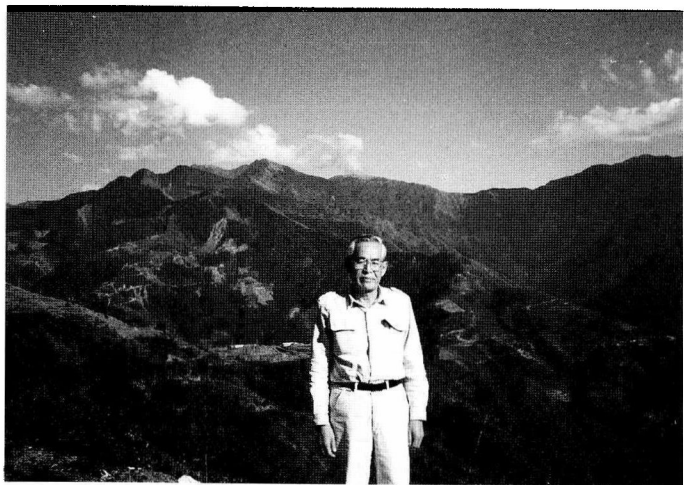


台湾・山地からの 報告

強制移住地・清流で「もと川中島神社の跡(建物はない)」



清流賓館より「中央山脈」を望む。



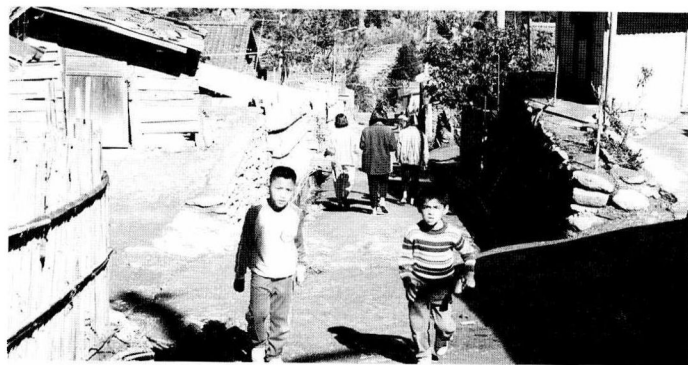
太平洋に垂直に落ちる山の裏が
花蓮県秀林郷。人買いが来る。



静かな日月潭。あの山の裏に
タイヤル族が住んでいる。



日本時代の家屋が残る万大の部落。



観光客で賑わう「霧社」





正月、
タイヤル族の正装のラウア。

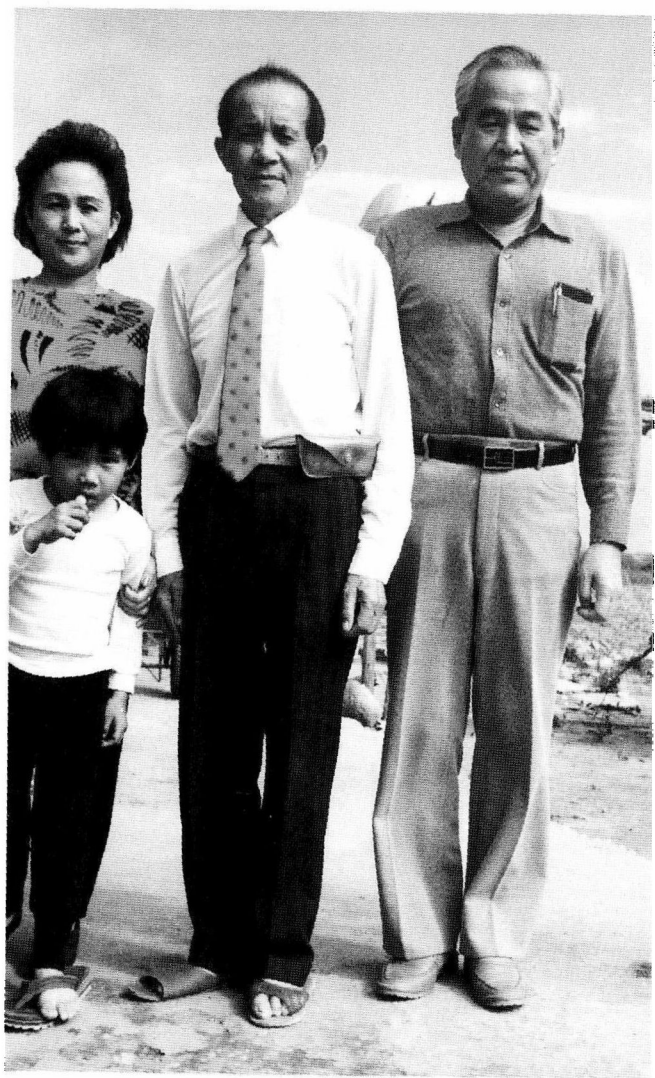


写真右から母親、父親、デンミ、ラウア
万大で、ユーカーンの一族。



万大でのお正月(ユーカー宅)。

珍しくネクタイをつけたアワイ・パワン（高愛徳）と。奥さんが写す。



蘭
嶼
島
—
ヤ
ミ
族
の
正
装。



ヤ
ミ
族。
煙
草
を
ね
だ
る
一
〇
五
歳
の
老
婆
と
涼
み
台
で。



ヤ
ミ
族
の
小
舟
「
タ
ラ
ラ
」
の
模
様
が
美
し
い。

